文脈で読む「身上さとし」（9）

明治 20 年 12 月～明治 21 年 2 月

天理大学人間学部講師
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

増野正兵衛の「おさしづ」を見ていくと、しばしば春野家の人々が登場する。以下に見る春野ゆうは増野正兵衛の妻いとの母で、春野千代はいとの兄嫁（春野利三郎の妻）である。

- 明治 20 年 12 月 2 日（陰暦 10 月 18 日）：増野正兵衛歯の障り伺／春野千代身の悩み伺／右件に付、運びのため神戸へ帰る伺／又心得のため伺／春野千代悩み伺
- 12 月 19 日（陰暦 11 月 5 日）：増野正兵衛咽喉腫れ食事通り兼ね咳出るに付伺
- 12 月 22 日（陰暦 11 月 8 日）頃：増野正兵衛伺
- 12 月 23 日（陰暦 11 月 9 日）：増野正兵衛伺／同日、増野正兵衛帰る際伺
- 明治 21 年 1 月 12 日（陰暦 11 月 29 日）：春野ゆう身上の伺（増野正兵衛の妻いとの母）
- 1 月 21 日（陰暦 12 月 9 日）：増野正兵衛願
- 1 月 22 日（陰暦 12 月 10 日）：増野正兵衛帰る際伺
- 1 月 24 日（陰暦 12 月 12 日）：増野正兵衛建家売却店を止め転宅の伺
- 2 月 10 日（陰暦 12 月 29 日）：穴門上徳永前栽に建家の事増野正兵衛伺
- 2 月 11 日（陰暦 12 月 30 日）：前件に付普請念入れる方宜しきや大層せずざっとして宜しきや、増野正兵衛追って伺

明治 20 年 12 月 2 日、増野正兵衛は「歯の障り」について「おさしづ」を伺っている。「治まり有って治まり無い」という言葉があり、正兵衛自身か、周りの者か、いまだ神意を十分に解していないことが諭されている。

また、同じく、春野千代の身上の障りについても伺っている。「右件に付、運びのため神戸へ帰る」とあることから、千代は神戸で病床にあるのだろう。千代の病いについては、これまで 7 月 23 日、 9 月 6 日、10 月 12 日と 3 度伺っており、10 月の割書きには「腹痛腰子宮痛み」とある。千代は 1 年後の明治 21 年 12 月に出直しており、病状は決して軽いものではなかったことが想像される。「聞くとわとと、理を踏み止める事出来難ない。だん〳〵処、こうのう一寸弛む」とあり、千代の病いに対して「おさづけ」を取り次ぐと、その効能の理で一時病状は回復するが、「理を踏み止める事」が出来ないために、しばらくすると元に戻ってしまう事が述べられているのではないか。1 カ月前の 11 月 4 日、母親・春野ゆうの「身上伺」においても、「さづけの証拠にて一時治まる。結構真の中に一つ処よう諭さなならん」と諭されていた。

12 月 2 日、追ってさらに「春野千代悩み」について神意を訊ねると、「痛み悩みは一寸発散は出来る。先ず〳〵一寸出来ても、とても〳〵心が退かん」と、やはり一時的な「痛み悩み」の回復ではなく、その原因である「心」のありようについて指摘され、「日々思う処違うてある。成程理は成程思うて、めん〳〵聞き分けねば分からん」と、親神の話を「成程」と聞き分けるよう諭されている。

さて、それから 2 週間ほど経つと、今度は正兵衛の咽喉が腫れて、食事が難しくなるほどに咳も出るようになった。19 日、22 日、23 日と繰り返し神意を伺っている。ここでは終始「どんと心を治め」と諭されていることが印象的である。増野家や春野家など、家族や親族に病人がおり、いろいろと心にかかる中で、「道の道なら通らねばならん、という心を定めてくれ」と諭されており、また、「めん〳〵一つ心あって、心を遙か向うを眺める心。内々それ〳〵身上思う。それか尋ねども、遙かどんと大き心で居よ」と、目の前のことだけではなく、遥か先を見据えた「大きい心」でいることの大切さが伝えられている。

年が明けて、明治 21 年 1 月 12 日、義母・春野ゆう（67 歳）の身上の障りについて「おさしづ」を伺っている。前年の 11 月 4 日では「伝え処はたんのうの道、これ一つである」と、「たんのう」について述べられていたが、ここでも同様に「世上見てたんのう、この心一寸治めてくれるよう」と諭されている。自身の病いの平癒を願うだけではなく、自分以外の周りの人々の状況、あるいは世界の現状に目を向けて、「たんのう」の心を治めるようにと伝えられている。

それから 10 日ほど経った 1 月 21 日、再び正兵衛が「おさしづ」を仰いでいる。「一日々々日は経つ。日々年を経（へ）、さあ一日々々聞き分け見分け、朝一日辺土変わる処、一日の日、銘々日々、日心得んという」とあり、それに続くお言葉も鑑みると、日々教えをただ聞くだけで終わるのではなく、「一日の日」でも教えを実行することの大切さが説かれているのではないか。次の日、神戸に帰るにあたって正兵衛は「主（あるじ）一つの理を聞いて、どういう理も早く治め」とのお言葉も頂いている。

さて、2 日後の 1 月 24 日、突然具体的な話となり、正兵衛は「建家売却店を止め転宅の伺」として神意を訊ねている。増野家が実際に「おぢば」に移るのはまだ 2 年先のことで、ここでは神戸の他の場所への転宅について伺っているのだが、この頃から少しずつ具体的に生活の整理を始めたといえよう。「おさしづ」では「どうせこうせとは言わん」と述べられた上で、「どうなるも一つ定め、さあ〳〵心勇むなら、早く事情」と人々が勇むように事を進めるよう諭されている。

こうしたお許しを得て、 2 週間余り経った 2 月 10 日に「穴門上徳永前栽に建家の事」について伺い、さらに翌 11 日に「前件に付普請念入れる方宜しきや大層せずざっとして宜しきや」と神意を尋ねている。「穴門」とは、現在の神戸市中央区にある元町穴門商店街の「穴門」か。両日の「おさしづ」ともほぼ同じ内容のことが述べられており、「暫くの処治まり、長くの間じゃない。今一時の処、先ず先ず一寸の心の休まり」と、将来のおぢば移転を見据えて、一時的な住まいとして考えるよう諭されている。

今回は、増野正兵衛を中心とした増野家の明治 20 年 12 月から明治 21 年 2 月までの「おさしづ」を見てきた。お道全体としては、明治 21 年 3 月 8 日（陰暦正月 26 日）に教祖一年祭が勤められ、正兵衛のおぢばでの働きも一層大きく期待されている頃といえる。その中にあって、義母や義姉の身上の障りが続き、正兵衛自身も歯や咽喉を患い、咳の症状にも悩まされていた。そのような状況に対して、「おさしづ」では、「遙かどんと大き心で居よ」と諭されていることが印象深い。